
女は強く、世を渡る

K R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女は強く、世を渡る

【Nコード】

N2307A

【作者名】

KR

【あらすじ】

全てに恵まれたお嬢様、エマ。そんな彼女に、突然降りかかった恐るべき試練とは？血と恐怖に埋め尽くされた先の見えない未来に、エマは自慢の魔術で突き進む。

エマはお嬢様？

剣と魔術による戦いの世界。

盗賊と魔物がうごめく巨大な大陸。

生き難い世の中では、誰もが強さを求められる。

そんな舞台で舞い踊る、儚い女性の物語。

元気の良い太陽に見下ろされながら、馬車にゆられること丸三日、
ようやく目的の村が見えてきた。

「父様！ 母様！ 櫓やぐらが見えます！ 収穫祭に間に合ったみたいで
すよ！ やったー！！」

「エマ、身乗り出すのはやめなさい。あなたはもう結婚にいく歳
なのですよ」

うう、そんなこと分かっているのに、母様はひどい。

今回が私にとって、最後のお祭り参加になるかもしれないって
うのに、こんなときまで結婚のことを言わなくても。

「もう！ 分かっていますよ、母様。お祭りで踊るのは今回で最後。
結婚してからはワガママ言っ、父様の地方視察へついて来たりし
ません」

私が、副領主である父様の娘として生まれてから、エマという名
で呼ばれ続けて今年で十七年目。ちょっとばかり裕福であることを
利用して、大陸中のお祭りに飛び入りしていた事も、今回で最後を
迎えてしまった。

今年のはじめ、前領主の不正を暴いた父様は、国王様に功績をた

たえられ、領主に任命された。私にとって父様が偉くなってくれるのはありがたい事だと思っていたのだけど。

「はあ、貴族の息子と結婚が決まっていたなんて、サギだよ」

古い歴史と莫大な財を持つ地方貴族たち。仲良くなれば力強い味方になるけれど、反対の場合は悲惨な思いをすることになる。

領主となった父様が、領地の平和を維持するために、貴族の力を借りる事は当然といえば当然の行動である。

「けどなあ」

大陸中で起こっている小さな戦争は、私も認識しているし、傭兵や術士によって、多くの領民が土の下に埋まることになっている現実も、良くわかってる。

だけど……、私は領主の娘として、役目をはたすことに抵抗を感じてしまっているの。

「そんなに悲しい顔をしないでくれよ、エマ。結婚の事が気になっっているなら、日程を変更してもらえるよう頼んでみるよ。来年にしてみらおうか？」

「あなた！ そんなこと言って前日も伸ばしてもらったのでしょ？ 今回ばかりはダメですよ」

「もー、二人ともケンカしないでよ！ 今度は絶対逃げないからさ」

父様は剣士としても一流なのに、どうしてこんなに優しいのかしら？ 知らない人が見たら、母様の方が強そうに見えちゃうだろうな。

私を含めた親子三人が乗る馬車は、護衛の騎士たちにかこまれな

がら、にぎやかな会話を運んで視察地の村へ入っていった。

村の様子は去年と変わりなく、質素な建物が立ち並ぶ。目を引く大きな建物とえば、村長の家と教会ぐらいで、背の低い家屋が密集する背後には、広大な農耕地が広がっていた。

変わったのは私だけだね。気ままな身分だった私が、いまや領主の娘。誰とでも普通に遊んでいた去年が懐かしいな。

自分の周りにはいつも護衛の兵士。時間があれば、国から派遣された偉い人達との会談、会食。大好きな祭りにも参加が難しくなつて、ついには見知らぬ人との結婚。

父様に無理を言つてついでにきた今回が、私にとって最後の祭りになることは間違いない。だけど、結婚を受け入れられない私の曇った心で、みんなに喜んでもらえる踊りができるのかな？

ああ、憂うつ。

「エマ、ため息なんかついていないで、降りなさい。もう到着しているわよ」

「あれ？ はーい、母様。いま行きます」

いじっていた自分の黒髪から、視線を外へ移すと、ちょうど目の前に、村一番大きな村長さんの家がそびえていた。

村長さんの家へお世話になるのは四回目。だけど今までとちよつと違うのは、護衛の人数だった。

父様が副領主だったころは、五人ぐらいの兵隊さんがついて来ていたけど、今日はなんと十五人。それも騎士階級の実力者が五人も含まれている。

私が馬車から降り、周囲をかこんでいる人たちを見て思うことは、領主っていう役職の重要性和、村長さんの家に十数人も人が泊まれるのだろうか、ということだった。

「ちょっと多人数だよね。大丈夫なのかな？」

「大丈夫ですよ、エマお嬢様。今年も来て頂いてありがとうございます。お部屋はしっかりと確保してありますよ」

すっかり顔なじみになった村長さんは、一段と白いヒゲが伸び、やせたように思えた。背が私より高いから、よけいに細く見えてしまう。

色々と苦労があるんだろうな。私が来たことで、迷惑がかからなければいいのだけど。

「こんにちは、村長さん。明日の収穫祭、楽しませてもらいます」「はい。こちらこそ、お嬢様の舞台を楽しみにしておりました。村の者達も同じ気持ちですよ」

小さな農村での祭りというのは、実際のところ派手なものではない事が多い。私が四年前にこの村へ飛び入りした時も、踊りと奉納儀式が中心になっている地味なものであった。

それがいまや、私の舞いを組み入れて、村全体が大騒ぎする大規模な収穫祭になってしまっている。来年から参加できなくなる私としては、ちょっとやりすぎたかなと後悔済み。

はあ、みんなになんて言えばいいのよー！

「エマ、どうしたの？ 着替えて皆さんに挨拶してくるんでしょ。考え込んでいないで、中へ入りなさい」

「うーん。このままでいいや。父様、母様、ちょっと行ってきます！」

私は、重量のある外出用のドレスを持ち上げて走りだした。母様の言う通り、服を替えるつもりだったけど、なんだか面倒になっち

やった。

「こら、待ちなさい！ シエノ、ラマ！ 追いかけてちょうだい！」

「お任せください、奥様」

「まったく、困ったお嬢さんだ」

よけいな世話だっというの！

ラマはシエノと違って口が悪いんだから、昔から我が家の護衛として勤めているからって調子にのってない？ 本当に父様よりえらそうなんだもんね。母様も当たり前前みたいに二人を指名するのやめてくれないかしら？

「ラマ！ 嫌なら母様のところへ戻ったら？ シエノがいれば十分よ」

父様達から離れ、村のみんなが作業している寄り合い広場へ向かう途中、私は後ろで大きなあくびをしているラマへ、嫌味をぶつけていた。

「そうはいきませんよ。尻のかるいお嬢様でも、雇い主の一人ではありますからね」

「この！ そこまでいうか！！」

口の悪さは天下一品のラマ。ふりむきざまに放った裏拳もかわされて、憎たらしくてたまらない。

もおり！ 茶色のクセ毛と同じように、性格もクセだらけなんだから！

「シエノ、なんとか言ってよ！ こいつってば、ちょっとばかり剣が使えるからって調子にのりすぎよ！」

「まあまあ、いつものことじゃないですか。怒るとききれいな顔がだ
いなしですよ」

うーん。シエノはいつも笑顔でお世辞をいうんだから、ちょっと
本気にしちゃうな。

だけど、女みtainな顔のシエノに言われても、あんまり嬉しくな
いぞ。私より背が低くて、肩まで伸びる金髪、ホントにラマと同じ
二十五歳の男性なの？

「ふん！ シエノが甘やかすからいけないのよ。ちょっとは怒りな
さい！」

「あははは、今度からそうしますね」

笑って誤魔化したな。まあいつか、ラマの性格は、死んでもな
おりそうにないもんね。

「エーマちゃん、寄り合い所が見えてきたぜ。さっさと行って、挨
拶でもなんでも済ませてくれよな。俺、腹へってんだよ」

「いっぺん死んでこーい！！！」

ラマの礼儀しらずな発言にすばやく反応した私は、振り向きざま、
髪にさしていた蝶の銀飾りを投げつけた。

「ぶへー！！」

「へっへーん！ 今度も殴りかかると思っていたのなら、大間違い
よ！ あんたみたいな筋肉バカに、肉弾戦なんか挑むわけないでし
よ。ざまあみなさい！」

私が投げた髪飾りは、みごとにラマの顔面をとらえていた。
意外な攻撃をうけて鼻をおさえるラマに対し、私はとても気分が

よく、草花が支配する地面の上を仁王立ちである。

「シエノ見た?! 狙いどおりよ! すごいでしょう。えっへん!」
「あのー、エマお嬢様。えー、もう少しまわりを気にかけてほうが宜しいのではないのでしょうか?」

なんのこと? シエノったら、なにを言いにくそうにしているのかしら? まわりがなんだっていうの?

私は、シエノが指をさす方向へ視線をうつし、絶句した。

「エマ様。お待ちしていました」

「エマおねえちゃん! いまのカッコ良かったよ!」

「お父様が領主になられたということで、おめでとうございます」

「エマ様の踊りを拝見するために、隣り村からやってきました。お会いできて光栄です」

ふりむいた私の前には、何十人という村人が集まっており、いっせいに話しかけてきていた。

いつのまに集まっていたのかしら? というより、わたしが道のど真ん中で偉そうに胸をはっていたのを、見ていたって事なの? うーん、どうしよう。

「おほほ、みなさんお久しぶりです。今回も、御一緒に楽しませていただきますね。うふ」

精一杯、上品な笑顔を心がけたつもりだったが、村のみんなが一步引いたのはなぜだろう? 慣れないことはするもんじゃないってことかな? まったく、こんなことで貴族の奥さんになれるのかなあ? ああ、憂うつ。

「いやあ、お嬢さまはお強い。護衛の方を一撃で倒されたとか。わたしもその場で、拝見させてもらいたいものでしたな。いやいや、さんねん」

村長さんの家でいただく夕食の席では、私のことばかり話題にのぼっていた。

昼間のことはみんなに口止めしたはずなのに、いったい誰が村長さんに話したのかしら？　むう、気になる。

「あの、村長さん。私が護衛の人を倒すなんて、その様なこと誰から聞かれたのですか？」

「いやいや、年頃のお嬢様に対して、強いとは失礼しました。気がききませんで、申しわけありません。実際に倒された護衛の方が、凄まじい強さだったと言っておられたので、つい口がすべりました」

おいおい！　ラマの奴、なにを言いふらしているのよ！　陰険な奴なんだから、あとで逆襲してやる！

すずしい表情でスープを口へ運ぶ私は、笑いをこらえる父様を一瞬だけ睨みつけたあと、反撃の計画をたてはじめた。

みてなさい！　偉そうな鼻、へし折ってやるんだから！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2307a/>

女は強く、世を渡る

2010年10月9日22時02分発行